

眼科学教室

当時、医局員は次々と応召し、山根浩教授の外、林合成、楊友香、両助手のみであった。教室外勤務として中島、崎元、森路の各先生が居た。看護婦は内田婦長の下に十五名居り、その他に近河カズ子研究補助溝口アサノ傭人、前田五十鈴小使が居た。

被爆時の状況

山根教授は眼科二階便所で被爆、ガラスの破片等で顔面、大腿部を夥しく負傷し、その後市外滑石にて治療中破傷風の冒すところとなり十五日死亡。

林、楊両先生は不在？

他の教職員も病棟で被爆。溝口、前田両氏と、内田婦長以下看護婦五名の死亡者を出した。

入院患者は大部分帰し、残当者は僅かで即死者もあつた。

故山根浩教授の略歴

正四位勲四等医学博士、眼科学教授

明治二十八年三月二十五日島根県に生る

大正十年七月京都帝国大学医学部を卒業す

大正十一年九月京都帝国大学助手に任ぜらる

昭和三年一月京都帝国大学助教授に任ぜらる

昭和六年三月長崎医科大学助教授に任ぜらる

昭和十一年十一月眼科学研究の為、欧米に留学、翌年十月帰朝す

昭和十七年三月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十七年六月陞敍高等官二等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い十五日鬼籍に入り転に殉す

主なる研究題目

トラコーマ性パンヌスに関する二三の臨床的竝に顕微鏡的視察

死亡者の官職並に氏名

官 職	氏 名
教 授	山 根 浩
傭 人	溝 口 ア サ ノ
小 使	前 田 五 十 鈴
看 護 長	内 田 敏 子
四 年	小 崎 タ ケ ノ
三 年	山 西 下 美 代
三 年	山 口 ヒ ロ

父の思い出

山 根 孝 夫

十年前の八月九日、父は朝の講義を了えて教授室へ帰り、眼科教室二階西側の便所へ行つていた時に丁度原爆が落ちたのです。全身にガラスの破片をうけ、そのまま地下防空壕に一夜をあかし、翌日も空襲が続くし病院の大半が壊れたので近くの防空壕へ避難していた。この頃は父もかなり元気で、故永井教授に「元気をだせ」など云つていたそうです。

その後どんなにして滑石の大神宮へ運ばれたのか、詳しくは知りませんが、角尾学長等と一緒にこゝで調教授の御介抱をうけたが、八月十四日になり病状急変し、破傷風の症状を起して死亡したと伝え聞いて居ります。

生前酒が好きであつたので、愈々望みなしとわかつてから、アルコールを口へ入れたが、もう咽喉を通らなかつたそうです。

原爆当時家族は誰も長崎に居らず父は同郷の永井教授の家に下宿して居りましたので、長崎に新型爆弾が落ちた事以外知る由もなく、新聞の報道も「損害軽微なり」という程度でしたが、三、四日すると故郷の方より医大へ行つていた学生等が帰つて来て、幾分長崎の様子も判つて来ました。しかし父は少し傷をうけていたが元氣の様でしたと云う知らせなので、そんな心配もせずでした。廿日になり突然、長崎で近所に住んで居られた宮田さんが、父の遺骨をもつてこられたので田舎の家では一同驚いて始めて父の死を知つた次第です。幸にしてあの多くの死亡者と混乱の中に父の死体を焼き、はるばる島根の片田舎まで遺骨を届けて下さつた宮田氏に感謝し、遺骨は田舎の墓地に埋葬する事が出来ました。

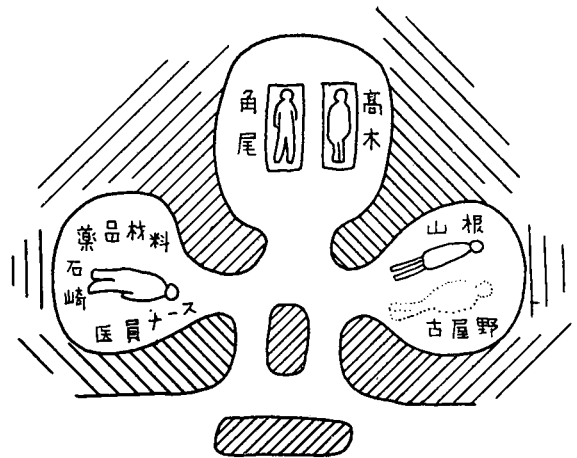
八月廿一日自宅で告別式を行いました。その日の朝小生は江田島より復員し、父の死も知らずに出雲今市駅へ着いて村へ帰るバスを待つて居りますと、車掌が「お宅は氣の毒でした」と挨拶するので、「誰か死にましたか」と聞いて始めて父の死を知り、急に自転車を借りてやつと葬式に間に合う様に帰りました。終戦当時の混乱の時葬式に間に合つただけでせめてもの幸と思つております。

山根浩教授

古 屋 野 記

あらゝぎ派の歌人山根浩教授は、日本眼科学全書の硝子体疾患を担当して戦前からいそがしくしていたが、漸く脱稿したところで、今度は教室員が応召で手落となり、益々いそがしくして居られた。戦争のひどくなる頃家族を郷里島根に疎開させて、保野正之助教授（病理）と共に同郷の永井助教授の宅から通つて居つた。保野君は多少健康を害していたので、原爆当日は永井邸の二階に臥せていて爆死された。

山根教授は眼科病室の便所に居て遭難され、顔面部、大腿部などに可成強い割創裂傷などを負つていられた。九日の夜は精神科下の壕中で過ごし、翌十日角尾、高木君等と共に外科教室の横穴防空壕に收容した。角尾、高木両君は手術用のベットがあつたのにねせたが、山根君はあとで着いたので渡廊下用の簀子板を土間に敷き、その上に横たわらせた。何分にも未だ空襲の可能性があるので外には置けない。私もその夜は山根君と枕をならべて寝た。せま苦しいが動くと山根君が痛たがるので、身動きも勝手に出来ない。山根君の創も手当てしたかつたが、道具も材料もないので赤チンキの塗布に被覆繃帯が関の山であつた。その晩は時々うめくと「痛いかな」「水をやるうか」と聞く位で、お互に格別の話はしなかつた。翌々日は三菱の救護班に懇請して角尾、山根両君を調教授の疎開さきである五キロばかり隔つた滑石郷の岩屋クラブに、次いで又郷社の拝殿に移した。この辺は調教授が受持たれて、角尾君と共に傷の手当



外科防空壕(横穴)

も比較的行届いたのであるが、十四日急激な破傷風を發し血清も角尾君からもらつて注射され出来る丈けのことはされた。何しろ拜殿のこどだから早朝参詣人が叩く太鼓の音で瘧癩を起すという悲惨眼もあてられぬ状況の下に、家族も教室員も居らぬが調教授等に看護られて八月

十五日逝かれた。たゞ御家族は無事であり、御長男は本年長大医学部を卒業されたので御安心であらう。

山根先生の回想

村 田 晨 六

学生時代から高校の後輩と云うことだけで、親しくしていただいた。四年で臨床を廻るのに三鬼門があつた。曰く、平井小児科、婦人科清水、それに一枚林と眼科が加わつていた。それでも隔日に山根先生の診察があつたので、一同骨抜が出来、時折は閑話を拜聴出来る楽もあつた。教授になられてからは仲々ヤカマシ屋になられたとか。

いっぞや皮膚科北村先生と新京に見えたことがある。さる割烹店での歓迎会の写真は、今も手元に有るが、北村先生のビール会社のポスターの様な笑顔と、山根先生の長顔の微苦笑の対比は、見る人の口を綻ばせずにはおかない。在新京で一番若いと云うことで、翌日の下情調査は小生に任かされたが、よき時代に歐洲を廻られた先生には面白い事も無かつたろうと思う。小さなアルメニヤカモデルンかで夕食は取り、処々を歩いたが、杯の数は五対一、勿論五は先生である。最後がカフェーになる頃は十対一、遂に十対零となつた。机にもたれて大舅の小生をゆりおこされ、自動車でなく頭車(マーチョ)で故人の永山寛さんの家へ引きあげたが、そこいらで一寸お茶でも飲んで来たと云う位の頒付であつた。今もリン／＼とマーチョの鈴の音が聴えるようだ。

岡山の学会の折、教室で十日位遊んでいたが、その頃もう酒は手に入りにくかつたが、これも故人の後藤純孝先生の結婚の為の特配酒と云うことで二本入手し、それで福盛で盛大な(?) 歓迎会を催して下さつたが、之が先生と最後の一杯となつてしまつた。

戦も我に不利、酒も同様の状態との内地の情報に、帰崎の垣山先輩に届けてもらった特大瓶のジンギスカンウイスキー、極めて先生らしくない丁寧な札状をいただいたのは、昭和十九年の秋も深まった頃だった。帰国後浅沼武夫先生から原爆の様子並に先生の最後の様子を知らされたが、酒が欲しいと一杯の酒を末期の水とされたとか、私は救われた気持ちになった。

その後

小笠原長秋

人吉市の陸軍病院診療室で、広島通過の軍医から、広島落下傘爆弾直後の凄惨な有様を詳さに聞いて間もなく長崎被爆のニュースがはいった。同僚の村岡忍軍医は、原子爆弾が、今度の戦争を左右すると、兼々話されていたが正しくその通りであった。濃厚真摯な平和主義者であり、有能な軍医であった村岡先生（諫早市）の予言が、見事的中した訳である。

帰心矢の如く、九月初旬、愈々、四日の休暇を貰って、長崎を訪れた。国友岳父の東陵中学の仮寓先を訪ねたところ、丁度、桜馬場の国房教授宅へ移転するところだった。幸いに同時に、国友先生にと大村海軍病院院長泰山少将が、救急車で、救援物資を運んで下さったので、移転先へその車に乗らせて戴いた。翌朝電線に引つかかり、瓦礫を踏み乍ら、浦上を訪れが、未だ電柱電線、木材散乱し、大学への坂道には、馬の死

体すところがついていた。くぐる様にして教室にはいつて行つたが、廊下を通ることもならず、茫然自失するばかりで、そのまま引返す外はなかつた。その夜、犠牲者の冥福を祈り乍ら人吉陸軍病院へと帰院した。

九月中旬、人吉陸軍病院を除隊になるや、急拠、長崎高商の長大本部を訪れたところ、影浦教授から現場責任者として、跡かたづけの仕事を依頼された。

幸いに、海軍より復員早々の、元氣一杯の、高木聰一郎、森田哲郎、陣内久四郎君などの同志を得て、更に又、眼科教室研究補助員の近河カズ子さんや、看護婦諸嬢の応援を得て、第一に眼科教室の清掃にとりかゝつた。凶書を死体安置室に、ついで長崎高商の一室を借りて、輸送保管した。当時毎日、歩いて浦上まで出かけ、昼食は畑の芋を看護婦さん達がふかして呉れたものだった。後になって、県庁交通課からトラックを出して貰う様になり、寝台やめぼしい器具を、新興善へ、新興善へと、幾往復した事だろう。当時の大学事務官から、表彰し度いと思つてもいるし、中食も大学から、何とか都合もするから兎に角、清掃作業を続けたいとおだてられましたが、一回、芋を御馳走になつただけと記憶する。

衛生教室で、大倉教授の遺体を発見したのも当時であり、又、或日のこと、進駐軍が、生化学教室の地下に分光器と共に顕微鏡が数十台あることを、教えてくれました。我々のグループの通訳は、専ら Mr. Tall-tree こと、高木聰一郎君が当つた。ダイヤモンド百錠瓶を米軍医から貰つて、得意満面たりし、当時の高木君を思い出す。生理教室の金庫を運んだり、或は、遺族立会のもとに、法医の金庫を破つたりしたが、

出て来たものは金指輪一個だけだった。

進駐軍の肝入りで、慈恵病院が設立され、各町内からの徴用入夫がや
つて来て、眼科の研究室の電気冷蔵庫や、皮膚科の遠心沈澱器、孵卵器
などを運ぶのにも、手伝わざるを得なかつた。眼科清掃が一段落するや、
清掃作業一ヶ月にして、十月中旬から、原因不明の熱病に罹り、三十八
度五分前後の熱が、どうしても取れないので、止むなく帰郷せざるを得
なかつた。

郷里で二週間許り就床の後、十一月初旬、再び長崎へやつて来た。

原爆地作業による、原爆症だと云う事は、ずつと後になつて分つた。

小生帰郷臥床中にも、高木君等の清掃は続き、新興善のペットは殆ん
ど全部彼等の手によつて運ばれたものである。

大学の大勢は大村海軍病院へ移つていたが、調院長先生が眼科主任代
理となられ、小生一人新興善小学校での眼科診療に当つた。

十二月になつて、熊さんが、婦長として来られ、五島和夫君や大島桂
君などの学生が、眼科診療の手伝をやつて呉れて大助かりだった。四月
になつて学生の成績表の提出を求められたには閉口した。

当時大村病院の眼科担任者がなく、従つて小生に、再三勧告を受けた
けれども、大学復興は浦上から、との一念で、どうしても、応じなか
つたところ、そのうち後藤純孝先生が、川棚病院から帰られて、大村病
院眼科を担当されることになつた。大村を捨てては、大学の復興はあり
得ないと云うのが、当時の主流派の意見であり、森俊夫先生始め、我々
新興善派と、意見は強く対立した。大村から、諫早へと、大学の復興が、
道草を食つた事は、衆知の通りである。

さて廿年の暮には、山根教授の御令息が来られて、遺品としての図書
を荷造りし、ついで、水産会社の専務——山根先生片眼白内障手術患者
——の方の御好意により、箱を数個作つて載いて、翌年（二十一年）六
月頃までには、教授室内に疎開してあつた先生の図書全部を送りとどけ
ることが出来たのは幸であつた。

二十一年六月になつて、京城医専出身で、支那から、復員の嵩則雄君
が、入局して来ましたので、愈々眼科診療室も活気を帯び、非常に有能
・頑健な同君の手によつて、ペンキが塗られ、机が、或は本棚が組立て
られ、兎も飼える様になつた。又二十一年三月末、台湾から引揚の義兄
国友昇氏——現在日大医学部眼科教授——も、四月から七月東京赴任まで、
小生の眼科手術を、手伝つてくれた。

同年十月、広瀬教授着任まで、凡そ一ケ年、眼科教室を預つて大過な
きを得たのは、一重に諸兄の御後援の賜だったと深く感謝する次第であ
る。

楊先生、林先生は長田の方へ疎開されたまゝ、帰台日時不明にして、
遂に、面接の機を得る事が出来なかつたのは残念。

山根教授は被爆後手厚い治療を受けられたが、テタヌスのため道の尾
で亡くなられ、土江助教授は、広島原爆で陸軍病院応召中死亡された
由。遙かに御冥福をお祈り致します。保険診療請求書提出を目前にひか
えて粗雑な回顧に終つた事を御詫び致します。

合掌。

（三〇年九月二日記）